

重唇音の軽唇音化について(5)
—慧苑音義の梵漢対音の検討—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

中村：前々回は「慧苑音義」(720年前後。下記水谷氏による)について水谷眞成(1959)¹により反切部分を検討しました。反切において重唇音と軽唇音が分かれており、これはいわゆる“類一致”によらない分岐なので、720年前後に軽唇音化が生じていたと想定することができます。今回は、水谷氏の論文の「慧苑音義」の対音部分を検討しようということでしたね。

吉池：水谷氏は、「慧苑音義」(720年前後)の「阿蘭若法 若然也反、阿蘭若者、或曰阿蘭那、正云阿蘭攘、此翻爲無諍聲云々」のような部分のうち、「阿蘭若法」を實叉難陀の訳、「阿蘭攘」を慧苑の訳とし、慧苑の訳を42種提示し検討します。また、同じ例によりますが、「阿蘭若法 若然也反、……」のような實叉難陀の訳「阿蘭若法」に対する慧苑の音注が付された音訳を31種提示し音注の部分を検討します。

中村：慧苑の42種の音訳と31種の音注は検討の対象になり得ますが、實叉難陀の31種の音訳については網羅的なものではないので検討の対象とはなりにくい。まず慧苑の42種の音訳を検討しましょう。

2. 慧苑の音訳

吉池：水谷氏は「三・一・二 實叉難陀の音譯漢字に對する慧苑の音註」において、明らかに慧苑による音訳と見なし得る42種の梵語語彙を提示した後、それを音節毎に分類して「三・二・二 對音表」として提示します。その中の唇音部分について、42種の梵語と音訳漢字の対応により確認し、再提示すると次のとおりです。實叉難陀訳八十卷華嚴經中の字母表の慧苑の音訳漢字は[]で括り提示します。網掛けは修正や補足をしたもの。取り消し線は削除するもの。1~6は欄外下の注記です。

表1. 慧苑の唇音

聲母	梵文	a	i	u	ā	ī	ū	ai(e)	au(o)	その他
幫	p	波		補			布			pa(1)鉢 ¹ 、pa(d)鉢 pan(n)鉢、 par 本 ²

¹ 水谷眞成(1959)「慧苑音義音韻攷」『大谷大学研究年報』11。『中國語史研究—中國語學とインド學との接點』三省堂、1994. pp.94-162所収。

滂	ph	[頗]坡								
並	b	[婆 ^{上聲}]		部						
	bh	[婆 ^{上聲}] 婆 ³				部				
	p								pu(ɣ)勃	
	v	婆	毗毘 ⁴				vai 鞞 ⁵			
奉	v	[縛 ^{房我反}]	毘 ⁴				vai 吠		va(r)伐	
明	m	麼 ^{莫我反} 摩忙	弭 ⁶	牟	摩					ma(ni)末、ma(n)邁 mañ(j)曼
	b									ba(1)末
微	m		弭 ⁶							

1. 本文は pa(r)。No. 9 尼羅烏鉢羅 Skt. nīla-utpala により pa(1)とする。
2. 42 種の梵語と音訳の対応資料中に pūr 本はない。
3. 實叉難陀訳八十卷華嚴經中の四十二字母に対して慧苑が注音をする。水谷眞成(1959)はそれを対照表示しており、それを「三・二・二 對音表」にも収める。婆^{上聲}は字母表の音訳漢字と音注。次の婆は 42 種の梵語と音訳の対応資料中のものである。水谷氏は文字表の例に音訳の例を含ませたのかもしれないが、念のため別に表記した。
4. 水谷氏は毘を奉母とするが、平声脂韻並母として表 1 では並母の下に置く。42 種の対応資料では毗 2 例、毘 1 例。同音字（異体字）として並置した。
5. 鞞は広韻の上声迥韻幫母の小韻としてあるが、水谷氏は集韻の平声齊韻並母とするのであろう。
6. 水谷氏は弭を微母とするが、明母として m の下に置く。

中村：もとの水谷氏の表はかなり不正確な点が目に付きます。校正の不徹底なのか、あるいは思い違いや思い込みがあるのか、判然としません。軽唇音化に関わる部分には特に注意が必要です。まず弭の扱いです。上の欄外注 6 にもある通り、弭は広韻では明母であり、語彙の 40. 阿弭陀婆耶 Skt. amitabha(ya)によっても mi に充てられていることは明らかです。微母とする理由がありません。また、毘・毗についても、欄外注 4 の通り、水谷氏は奉母としましたが、広韻では並母です。毗については、「三・二・三・一」に提示された玄應音義や慧琳音義との対照表(158 頁)においても、一貫して奉母としていますから、確信的な措置のように見えます。その理由は分かりません。しかも、この毗については微母去声として扱っている箇所もあります(147 頁の 2 Skt. vai の記述)。この例については少し事情が複雑なので、後ほど實叉難陀の音訳に対する慧苑の音注を確認する際に述べたいと思います。

吉池：この表には、軽唇音化に関わる非母と敷母の字が出てきません。奉母の字は梵語の v に用いられています。

中村：水谷氏も述べているように、すでに軽唇音化が起こっていたので、非敷奉母を梵語の両唇音 (p, ph, b, bh) に使用できなかったと考えれば、説明は付きます。梵語に f はないので、非敷母の出番はなかったということでしょう。

3. 慧苑の音注

中村：表 1 に微母の字は見えません。非敷奉母において軽唇音化が生じていたとすると、微母においても同様に軽唇音化していたと考えられますが、問題はその音価です。水谷氏はいわゆる非鼻音化との関連もあり、微母を [mj->mv-] とするようです。

吉池：それはどこに出てくるのですか。

中村：實叉難陀の 31 種の音訳例の中の 2. 毗盧遮那 Skt. vairocana において、慧苑が「按梵本毗字應音云無廢反」と注を付けています (144 頁)。つまり、通常は並母である毗を微母去声の「無廢反」で読むべきだということです。水谷氏はこれに *mjiwei*-> *mvjiwei* という音価を与えています。前に述べた通り、これによって毗を微母去声とし、去声が梵語の長母音に充てられている例の一つとした訳です (147 頁)。

吉池：しかし、表 1 の欄外注 4 で指摘したように、水谷氏は毗を奉母としたのではなかったのでしょうか。

中村：はい、そこが全く辻褃の合わないところです。水谷氏は、慧苑が毗を微母としたのを認めて、それを利用しているにもかかわらず、表では奉母として扱うというのが矛盾しています。

吉池：水谷氏の扱いに矛盾があることは措くとして、慧苑はどうして毗を微母としたのでしょうか。

中村：おそらく微母はすでに軽唇音化しており、その微母の音価が慧苑の知っている梵語の v の音に近かったからでしょう。

吉池：非鼻音化と関係するのでしょうか。

中村：そうかも知れませんが、梵語の v の正確な音価が分からないので、微母の音価は決定できません。慧苑の毗：無廢反という音注は、梵語の vai に用いられるからには並母ではなく微母で読むべきだという慧苑の意見を表明したもので、微母が梵語の v に近いと慧苑が感じていたということしか示しません。非鼻音化のいかんに関わらず、つまり微母が mj-であろうと mv-であろうと、梵語の音価次第では互いに近いと感じる可能性はあります。

吉池：慧苑の毗：無廢反という反切が誤記だという可能性はありませんか。

中村：全くないとは言えませんが、誤記だと断じる理由はないようです。これに関連して、實叉難陀の 31 種の音訳例の中の 8. 阿溼𑖀 Skt. aśva の𑖀に対して、慧苑は「音苻何反」としますが、これを「無何反」とする異本が三本あるとも記しています。後者の反切を有効とした場合、慧苑は𑖀も微母として扱っていたことになり、梵語の v を当時の漢語の微母の音価に近いと見なすことが一貫した態度であったことになります。

吉池：實叉難陀の 31 種の音訳例をみると梵語の v に並母の毗や奉母の𑖀を使用したのに対して、慧苑はそれを敢えて微母に読ませることにより、梵語の発音とのすり合わせをおこなったということですね。

中村：ところで、水谷論文で扱っている實叉難陀の音訳は網羅的なものではないので、その特徴について確かなことは言えませんが、念のため確認だけはしておきましょう。實叉難陀の音訳としては 31 種の音訳とそれ以外にも幾つかありますね。

4. 實叉難陀の 31 種の音訳

吉池：實叉難陀の音譯漢字のうち唇音を表 1 のまとめ方にしたいが提示すると次のとおりです。實叉難陀訳八十卷華嚴經中の字母表の音訳漢字は[]で括り提示します。

表 2. 實叉難陀の唇音

聲母	梵文	a	i	u	ā	ī	ū	ai(e)	au(o)	その他
幫	p	[波]								
滂	ph	[頗]								phe 啤 ¹
並	b	[婆蒲我反]	毗							bo 菩
	bh	[婆蒲餓反]								bhra 勃
	p	婆								
	v	婆	毘 鼻					毗		ve 薛 ² 、ve, vai 步
奉	v	𑖀 ³ [縛房可反]								
明	m	忙摩 [麼]	彌							myak 猿、mā 麼摩 me 謎、maud 目
	b									
微	m									

1. 啤は集韻去声霽韻匹計切により滂母とする。

2. 薛は集韻去声霽韻蒲計切により並母とする。
3. 嘽は集韻にない。慧苑の注記「音符何反」及び、縛（広韻入声藥韻奉母符纒切）に口偏を付した字とみて奉母とする。

中村：欄外注3で触れられている奉母の嘽については、後代の記述ですが、康熙字典の口部・十六画に「《海篇》音縛。呪語。」とあるので、陀羅尼などの梵語における音訳専用字と見なされていたのだらうと思います。慧苑が嘽の反切を符何反とするのは、字母表における縛の房可反（慧苑は房我反）と音がほぼ一致します。嘽・縛ともに入声韻尾-kはないものとして扱われています。

吉池：表2においても、表1と同様に非敷母は使われず、奉母は梵語のvに使われています。實叉難陀による訳経は7世紀末なので、慧苑の音義（720年前後）と同じ状況を示すのは不自然ではありません。これに依るならば、7世紀末にはすでに軽唇音化が起こっていたと考えてよいでしょう。正確な音価は決定できません。

中村：31種以外の實叉難陀の音訳はいかがでしょう。

吉池：水谷氏が挙げる42種の慧苑の音訳語の音義は次のようなものです。「閻浮檀金具正云染部捺陀、此是西域河名云々」。「閻浮檀金」は實叉難陀の音訳で、それを変更した「染部捺陀」を水谷氏は慧苑の音訳として整理します。この實叉難陀の音訳例の「閻浮檀金」ですが、浮は軽唇音字でサンスクリットのbuに相当します。このようにして、水谷氏が慧苑の音訳として挙げる42種において、その注釈中に見える實叉難陀の音訳を、表2に見えないものを挙げると次の9例となります。

- 「8. 閻浮 bu 檀金」「10. 頗 pha 梨色」「13. 閻浮 bu 提」「14. 弗 pūr 婆提」
「16. 文 mañ 殊師利」「25. 毘舍浮 bhū」「27. 弗 pu 沙」「38. 南無 ma」「40 阿彌陀佛 bha」

中村：表2のもとになった31種の音訳は、實叉難陀の音訳のうち慧苑による反切が付されたものだけを挙げたので、そうではない上の9例は収められていないということですね。これらは頗を除くと、他の8例はすべて軽唇音で梵語の両唇音を表しています。

吉池：9例を見ると、閻浮、文殊、南無、阿彌陀佛など伝統的な音訳が目につきます。これらについては、實叉難陀は伝統表記をそのまま用いたが、慧苑は当時の漢字音に適合する音訳に改めたということでしょう。

中村：實叉難陀の音訳には伝統的なものと新たなものが含まれていた。表2のもとになった31種の音訳には、たまたま軽唇音字を含む伝統的なものがなかったということですね。

吉池：われわれは水谷氏がまとめた資料を利用しただけで、一切経音義を網羅的に調査し検証したわけではないので確かなことは言えません。しかし限られた資料を見た個人的な感觸としては、實叉難陀の訳経時代にもすでに軽唇音化は起こっていた、そのように見えます。

中村：實叉難陀については材料が十分とは言えませんが、少なくとも慧苑については、反切においても梵語の漢字音訳においても、軽唇音化は明瞭に認められると言えそうです。それでは今回はこれまでとしましょう。